

空



2005年

SORA 10号

晴夜 (10) | 2

柴田 佐知子

鶏小屋の粗繕ひや金盞花

さんざんに古りて雛の傾がざる

四方より春来て母のふくらはぎ

あまりにも大きく涅槃し給へる

花粉症らし正論を述べゐるは

老僧に美僧つきゆく桜かな

据ゑられてまだ濡れてゐず甘茶仏

見わたしして低き山なみ鳥の恋

魚の血の染みたる舟や黄沙来る

曹蓬水

遠野 萌

神の山呑み込んでゆく春の闇
春風や貴婦人といふ汽車通る
つくばひに鳥の浴びあと梅の花
ふらここを揺らして過ぎぬ旅靴
蚕豆がぎつしり閉所恐怖症
畦塗りて水音高き母郷かな



憑きものの落ちたるごとく春の猫

燕来る余震の島の古りし巢に

首賭して誓ふ約あり武者人形

海老のひげ切つて焼きたる旧端午

白南風や園児はいつも手をつなぎ

窓へ向く人体模型梅雨きざす

掌にあれば青きかたまり雨蛙

卯波とは海女桶揺らす波のこと

夜気を吸ふ髪の重たき曹達水

・お陰様で・

福岡有史以来の地震に電話や道すがらの人に幾度も使った言葉である。

日頃はご無沙汰ばかりの方々であるが、冷静に考えると「災害時ダイヤル」を知っていたにも拘らず、つながらない電話に焦り、何度もダイヤルしていたとの事。興奮していた声が次第に普段の声に戻る。こんなに心配してくれていたと胸が一杯になる。

最近つくづく縁を思う。例えば、母の転院の度にお世話になる方々、旅先で親しくさせてもらった老夫婦等は、一期一会のご縁。

俳句による縁は一期：でないのが嬉しい。句座に着く度に真剣さの中にも人間としての多くを学んで帰る。

このすべてのご縁に心からお陰様でと言いたい。

春の野辺

服部 早苗

まづ出でて大寒の気を身に充たす

命名の書ののびやかに春隣

豆撒きし闇やはらかに赤子寝る

梅の花舟のやうなる雲ひとつ

独活と読むことを知らぬも母乳ゆたか

沐浴の赤子めつむる雪催



ぼかぼか暖かい三月最後の土曜日、隣の岩槻にぶらつと歩きに行った。

人形の生産全国一の町というだけに、駅に降り立つと、もう目の前にはひな人形、五月人形を売る店が賑やかに幟を立てていた。町全体が古い城下町、そして日光御成道の道筋にあたるので宿場町としても栄えたらしい。

雪折れの桜老樹を前にして

紙雛うすきひかりに立ちたまふ

つるし雛たつきのものもぶらさげて

かたかごや詠むとは祈ることに似て

抱き重りしてみどりごは春の野辺

涅槃西風小田原城に象のゐる

うららかなる赤子の手足空をゆく

来し方に菜の花のあり行く末も

みどりごの喃語に応ふ一落花

ちようど雛祭(旧暦)の時期でもあり、地元の商店の店先に、代々伝わる古い雛人形などが大切に飾られていた。それらをひとつひとつ見て歩くのも楽しかった。髪がおけた享保雛のお内裏様を前に、その由来などを聞いていると、ほの暗い室内の、そこだけゆっくり時が流れているようだった。

三十分も歩けば町外れなのだが、また一軒古い店があった。ガラス戸を開けて入ると、美しい若い女性が機織のような大きな台の上に正座し、組紐を製作していた。十色以上の絹糸を右に左に操っていた。聞けば、昔、この店は紺屋だったという。女性が坐る座敷のその下には、大きな藍瓶があったのだとか。長い長い土間が脇にあった。店の和三土から続くでこぼこした暗い土間であった。そして、その先に裏庭。裏庭は春の光に満ちてわけもなくまぶしく…。それは、懐かしい時代のように見えた。

麦二寸

青山 悠

吉野旅行・十句

高速道二月の空のあるばかり

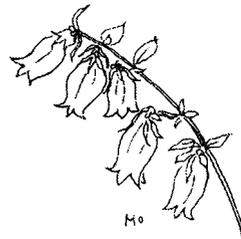
風花の飛びついてくるバスの窓

連山の果てはありけり麦二寸

白壁の続く街道水温む

享保雛すこし反り身の矢大臣

足元のおぼつかなくて紙雛



・御開帳・

四月三日、小雨の中を福岡県須恵町佐谷建正寺跡の観音堂に着く。回りの木々よりぬきんでた枝垂桜が美しく堂を覆わんばかりである。

羽衣の形にしだれざくらかな 悠
村人に守られるこの堂の秘仏は毎年四月第一日曜日が御開帳である。「空」の仲間とやってきた観音堂では地元の方た

古墳への道の湿りや落椿

料峭や黄泉へ導く鳥と船

羨道にのこる火の跡春寒し

墳守りの筑後訛や烏雲に

青き踏む河童伝説聞きながら

羽ばたきのいくたび過ぎし椿山

福岡西方沖地震

三月の沖の暗さや余震なほ

中空にさくらしだるる秘仏堂

山伏の墓より高き酸葉かな

ちの御詠歌が済んだところであった。いつもはコンクリート製の安置所に収められ鉄扉により鎖されている秘仏十一面観音像は、高さ一七五・三センチで最澄が渡唐以前に宗像郡にて作ったと伝えられている。旧拝殿横の長持の中で発見された時は、虫喰いのためぼろぼろの状態だったという。それを奈良の仏師、白石義雄氏が修復復元されたそう。頭に十一面の化仏を乗せた美しい観音像に額から頬に一縷の暇があるのが何ともいたわしい。この「観音像」及び堂の横の「正中二年（一三三五）銘板碑」は福岡県指定文化財・彫刻No.1だそう。

御開帳のこの日、男性は受付や子供相撲の世話、女性は参詣人への接待の炊出し、女の子は花車を曳いて村中を廻り戻ると甘茶の接待などそれぞれ忙しそう。私達が僅かばかりの御布施を差上げると堂に上がれと進められ、山菜の料理や御酒までも頂戴した。あたたかい村の方たちのおもてなしに心組み、満ち足りた一日をすごした。佐谷の皆様有難うございました。それから幾日か経っただけなのに、もう懐かしい地なのである。

亀裂

秋 千晴

回りつつ歪みを正す石鹼玉

春眠の底に亀裂の大余震

だんだんと大きくなりし花筏

さくら明りの縁側を上座とす

佐谷

開帳のたび嫁ぎきし地に馴染む

教へ子は世話役となり御開帳



春うらら子犬の足の太かりし

芝桜境界線も覆ひけり

牛が寝て雲雀が鳴いて伊都の国

厨の窓に桜桃の花押し寄せし

総身を花粉まみれのだるま蜂

話しつつ粽巻く手の速かりし

延び延びの手紙に八女の新茶添へ

蹲に遊んでゐたる縞蜥蜴

とろ箱の烏賊の光りて波打てり

天の川母の体は冷えてゐし

桜の舞う中、久々に家族で近くの駕輿丁公園へ行った。大濠公園の二倍の広さがあり、桜並木は足にやさしい道に舗装されている。家族連れ、夫婦、友人、カップル等、桜色に染まっていた。

池では鮒が時折、花筏を崩して泳ぎ、アヒルはおもちやの様に浮かんでいた。娘がダックコールの笛を吹くと近付いて来るが途中より反対向いて行ってしまふ。主人も少し笛の音をアレンジして吹くとまた近づいて来るが、やはり近くに来ると反対向いて行く。鶏の鳴き方は国によって違ふと聞く。この笛はアメリカ製なので日本のアヒルには外国語のように聞こえたのだろうと諦めた。

駄々こねて泣いている児に吹いてみると泣き止んだのでおかしかった。

空作品抄

柴田佐知子

連山の果てはありけり麦二寸 青山 悠

吉井町吟行の折の句。高速道路では雪であったが、雛巡りのころは、明るい日差しで白壁の静かな町並みをゆつくり歩くことができた。耳納連山であろう。山なみが平地へその裾を納めてゆくところが「連山の果て」なのだ。「凧の言水」としてその名をとどろかしたという〈凧の果はありけり海の音 言水〉に響き合わせるかのごとき悠氏の作品である。本歌の轟く海に対してこちらは青々とした「麦二寸」。大景の鮮やかな収斂である。

春眠の底に亀裂の大余震 秋 千晴

福岡西方沖地震：このような名の地震に見舞われるとは思っていなかった福岡県人である。三月二十日に震度六弱そして四月二十日には大きな余震が起こった。「春眠」といえば暢気な句が多いのだが、その春眠の只中の大余震。「春眠の底に亀裂の」の措辞は一息に詠みきつて力がある。思い出したように小さな余震があるが、このような春眠の句はもう詠まずに過ごしたいものだ。(以下略)

日差せば呂鬚れば律や芹の水 高 千夏子

音楽に造詣の深い千夏子さんであればこそその作品。呂律は呂旋、律旋という日本や中国の伝統音楽の音階である。芹の水というのであるからそれほど大きな流れではあるまい。そのせせらぎが日差しの中と翳った時とでは音が違ふと聞きとめたのである。

〈鯛雲日かげは水の音迅く 飯田龍太〉は『百戸の谿』所載の句。龍太俳句は日かげの水音を迅いと感じ、そこに日ごと冬へと向う自然をとらえ、千夏子俳句は光のうつろいで変調するせせらぎに早春の息吹を詠みとめられた。次の句も面白い。

春のまくなぎ悪女大姉と云ふべかり 高 千夏子

悪女大姉とも言うべき人とは…心惹かれるところ。